

具象的想像力

—万葉集第3, 4歌の場合—

福沢武一

天皇、宇智野に遊獵し給へる時、中皇命、間人連老をして獻らせ給へる歌

やすみししわが大君の
朝にはとり撫で給ひ
夕べにはい寄り立たしし
みとらしの梓の弓の
奈加弭の音すなり

朝獵に今立たすらし
夕獵に今立たすらし
みとらしの梓の弓の
奈加弭の音すなり（第3歌）

反歌

たまきはる宇智の大野に馬なめて
朝踏ますらむ
その草深野（第4歌）

1

天皇は舒明天皇で、宇智野に狩獵された時、中皇命が父帝に献上された長短二歌です。中皇命は間人皇女だと考えられます。当時10歳ぐらいで、間人老が代作し、明日香の都から西南20キロへ離れた宇智野へ使したに相違ありません。⑥

手始めとして大意をとってみます。

ヤスミシシわが大君が、朝方は手にとってお撫でになり、夕方にはお立ち寄りになっていつくしまれた梓のお弓の奈加弭の音がする。

天皇は朝の獵に今お立ちになるらしい。夕方の獵に今お立ちになるらしい。梓のお弓の奈加弭の音がする。

以上が長歌です。ヤスミシシは「大君」の枕詞。「い寄り」のイは接頭語。「奈加弭」は中弭の

ほか、長弭、鳴り弭（奈利弭）、さては金弭（加奈弭）等、訓義ともに決しかねています。⑦

「獵に立たす」の通解は、獵に出発なされる。異解は、獵を催される。

ランは、確かな根拠による推量で、ここでは弭音が根拠になっています。「音すなり」のナリは、聴覚によってそのものを推定します。ここでは「天皇ご愛用の梓弓の弭音だな」と察したのです。

ひと通りの説明を加えましたが、問題を数々内蔵しています。中でも、「今」が朝獵・夕獵にわたっていることが古来問題視されてきました。

上の朝夕てふ言を転じいふ文也。（万葉考）これが通解です。⑧ 異口同音にいうのです。——朝・夕は修辭的な並列にすぎない、と。やがて批判の口調が強まってきます。

「暮獵に今立たすらし」は全く対句を作る為に仮用したものと考へなければなるまい。かういふやうに対句を作るためには、ない事實を仮設までしてあるのである。（春陽堂万葉集講座(3)吉沢義則氏説）

これを極言すれば次のようになります。

「暮獵に今立たすらし」は嘘である。（叢説吉沢氏説）

「暮獵」は、……この場合としては不合理な語である。（窪田氏評釈）

津田左右吉氏は万葉集の長歌に「概念化され、抽象化せられる傾向」を鋭く指摘し、主題歌の該当箇所について次のように酷評しました。「その甚しきもの」と。（同氏国民思想の研究(1) 118 べ参照）

こうした不評に接するにつけて、万葉歌の名誉を挽回することが僕の悲願でした。本項もそのための當為です。

反歌の方では、「朝踏ますらむ」と「その草深野」の断続が一番問題になります。ここでは句切

って、訳文を与え、後ほど考察を加えます。

タマキハル、内の広い野原に馬を並べて朝方踏み立てておいででしょう。その草深い野原よ。

2

引き続いて私見をつづったのですが、それを書き写す前に、新たに一項をはさむ必要が生じました。石母田氏が注目すべき意見を発表しました。それは批判を決定的にしたものです。それを論破しないことには主題歌の名誉挽回はありえません。

石母田氏は次のように論じ始めます。

この長歌の新しさと生命は「音すなり」や「今」にある。(万葉集大成(5)初期万葉とその背景, 178べ)

この見解は次の重要な契機を含んでいます。従来の万葉学者から聞かれなかった指摘です。

耳をすませばはっきりきこえてくる中弭の音を、現在の瞬間と状況においてとらへ、また獺に出で立たうとする「今」とらへてあるところにこの長歌が、紀歌謡にない新しさをしめしてあるのであり、この境地は初期万葉が新しく開拓した美しさの一つであると考へられる。(同書同べ)

重要なのは、(1)作者が今現に置かれている状況を自覚したことです。その意味で、(2)個性的な歌が作られるようになったのです。

しかし、喜んでばかりはいられません。きびしい批判が始まります。

全体としてすぐれたこの長歌にも、一つの破綻がある。いふまでもなく、「朝獺に今立たすらし、暮獺に今立たすらし」といふ句にみられる不合理と非写実的表現である。……「音すなり」と、「朝獺に今立たすらし」の「今」に、この歌の生命があることはまへのべた。この特殊な瞬間と状況において長歌全体が統一されることがもっとも必要であり、それこそがこの歌の「詩的現実」にはかからないにかかわらず、「朝獺に今立たすらし、暮獺に今立たすらし」といふ対句は本質的な破綻であり、分裂である。(同書179—180べ)

二つの「今」が通解のごときものならば、主題歌は救い難い破綻にさいなまれています。しかし僕は絶望したくありません。修辭的な「今」ときめつける前に、も一ど救出の途を探したいのです。万葉を愛するならば、それは義務ではないでしょうか？

石母田氏の批判は核心にふれています。一歌を破綻へ導いた禍根が次のように指摘されました。

- 1 作者の「精神の充実の不足。」これが次のことを結果します。
 - 2 自らのこととして「ものを見、ものをつかむ」ことをせず、
 - 3 外的に、「主人の意にかなふために、莊重にしたり、形式をととのへたり、才智を誇示した」りした。(同書180—1べ)
- 3について石母田氏は次のように細述します。

万葉歌人中屈指の芸術家であったとみられる間人連老の作品におけるあのやうな破綻や分裂や精神の充実の不足は、それが皇后の命によって舒明天皇に献げられた歌であることと無関係ではないであらう。……私はこの一首のなかに万葉の長歌の頽廢の第一歩がすでにふくまれてゐたとみてゐる。(同書182—3べ) ④

一歌は完膚なきまで批判されました。しかし、僕はそうは思いません。いかにも代作でした。歌わずにはいられず、自発的に歌い出す動機ではありませんでした。しかし、お役目だけで、ただ向こうの嗜好にあわせて飾り立てただけの歌とは思われません。一歌に奴隸根性を烙印することにとても我慢はならないのです。作品が宿している作者の声を虚心に聞きたい。ここに一歌の破綻を救う途を見出したい。それが僕の前々からの悲願でした。

3

こんどは「今」の弁護を時代順にききます。

朝と暮と二つながら今たすらしといへること、誰も疑ふめり。こは朝かりとは、朝饌の料をとるをいひ、夕かりとは夕饌の料をとるを云名にて、其獺する時を云に非ず。(玉の小琴)

これは強弁というものです。追従者のないのが当然です。

夕がりにいまたすらしとは、夕獵をもしたまはむとて今より出ち給ふらしとの心。

(燈)西郷氏私記、同説

想定は不可能ではありません。ただし、想定そのものの可否について後にふれます。

朝獵とて今挙行なされるのであらうと思ひ、今日暮になると、夕獵として今挙行なされるのであらうと思ふ。(折口氏口訳)

このように「今」を朝・夕に分割するわけにはいきませぬ。

朝獵の今は朝獵の時を言ひ、暮獵の今は暮獵の時を言ひ、朝暮の獵を挙げて終日の獵を総括して叙べたるものと解し得べし。(論纂吉田氏説)

このように「今」を終日へ拡大することも不可です。

朝には朝獵が行はれるらしい、夕には夕獵が行はれるらしいと想像して……「朝夕」の連発、「今」の反復で、その時々刻々も父帝の御身の上を去らぬ皇女の迫り切った愛情の閃きを巧みに表現したいみじき完作である。

(金子氏評釈)

「今」を時々刻々とすることも認めかね、「いみじき完作」も滑稽に響きます。金子氏は言葉を続けます。

「長弭の音すなり」は現在的叙法であるが、実際は皇女の描かれた想像を現実的に扱ったもので、語句を強調し、印象を明瞭ならしめる手段である。(同上書)

結論が先になってしまいますが、敢えて表明すれば、——僕の観点もこれ以外に出ないのです。耳にするのは想像としての音——幻聴です。折口氏も先の引用文に続けています。

お別れ申して都にゐると、朝晩お弓の長弭の音が、どうかすると、耳に幻覚として聞えて来ます。(口訳)

獵は朝夕にわたります。ただし、幻聴する作者の時点の一つに僕は考えます。時点というよりも、「今」は「今日あたり」といった幅があつて悪くないはずです。その時、朝獵・夕獵の矛盾は霧散します。皇女は明日香の宮にとどまり、そこ

から一歌を宇智の獵場へ送りとどけたのだと考えます。——帝は宇智へおいでになられ、もうそこで朝夕の獵を盛んになさっていらっしやるらしい……と、遠く獵場を思いやったのです。

「今」は一小時点に限らない。そのことを論証しなければなりません。臆説に終わらせないためです。

高島のあどの港を漕ぎ過ぎて塩津菅浦いまか漕ぐらむ(1734 小弁)

これは小さい時点を意味していません。まさに「今ごろ」に当たります。

高円の宮のすそみの野づかさに今咲けるらむをみなへしはも(4216 家持)

この方がもっと幅がでます。「今日このころ」がふさわしいですね。

いまのみのわざにはあらず古への人そまさりてねにさへ泣きし(498 人麿)

「今」は実に幅が大きい例です。「今の時代」に当たります。

「今」がほどほどの長さの例歌がまだあります。引用が長びくけれど、是非参照いたしたい。

車持朝臣千年の作る歌の一首

いさな取り浜辺を清み うちなびき生ふる玉藻に 朝風に千重波寄り 夕風に五百重波寄る 辺つ波のいやしくしくに 月にけに日に 日に見れど 今のみに飽き足らめやも 白波のい咲きめぐれる 住吉の浜(931歌)

これは元正天皇が難波宮へ行幸された時の応詔歌と推定されます。時は神亀二年です。続日本紀によると次のようでした。

冬十月庚申(10日)、天皇難波宮に幸す。

辛未(21日)、詔して、宮に近き三郡司に位を授け、祿を賜ふ。各々差あり。

11月乙丑(10日)、天皇大安殿に御して冬至の賀辞を受く。

天皇の難波宮滞留は10日間を越えました。千年の作品の「月にけに日に日に」はその期間を指している、11月までまたがっていたことを暗示しています。その期間が「今のみに」の「今」に重なることはいうまでもありません。

今の行幸の度ばかりにては飽きたらめや。又もゆきかへりつつ見てんといふ意……。

(攷証)

……今度だけで飽き足りようか。(総 積森
本治吉氏説) 全積, 同解

「今度」を捨てかねます。しかし、「月にけに
日に日に」を背負っている「今」です。幅も深み
もある「今」だといいたいのです。

主題歌の場合、「今」は恐らく3, 4日にわた
るでしょう。とにかく「今ごろ」なのです。朝夕
を含むのは当然だったのです。

4

弭音を幻聴とする時、それは獵場の音でなけれ
ばなりません。ということは、「今立たすらし」
の「立つ」が出発でないということです。それは
先の引用文からも察せられます。一部に限って再
度引きます。

朝獵として今挙行なされるのであらう。

(折口氏口訳)

朝には朝獵が行はれるらしい。(金子氏評
積)

ごらんの通り「獵に立つ」は、通解とは違っ
て、「獵をする」の意です。そのように明言した
先学がいます。

立は獵に立給ふなり。出立たまふにはあら
ず。(安藤野雁万葉集新考) ㊦

他の例歌の場合はどうか？

……わが大君は み吉野の蜻蛉の小野の 野
の上には跡見すゑ置き み山には射部立て渡
し 朝獵に鹿猪踏み起こし 夕狩に鳥踏み立
てて 馬並めてみ獵そ立たす 春の茂野に
(926 赤人)

あしひきの山にも野にもみ獵人さつ矢手挟み
乱れたり見ゆ (927 赤人)

前文からの続きで、獵を催していることが自然
です。反歌からもそれがいえます。

日並の皇子の尊の馬並めてみ獵立たしし時は
来向かふ (49 人麿)

すでに狩獵をしつつあるはずです。

ここに井上氏に重要な発言があります。「獵に
立つ」と「獵立つ」をきびしく区別するのはです。
前者は獵に出発する。後者は獵をする。(新考149
歌注参照)

手束弓手にとり持ちて朝獵に君は立たしぬ棚

倉の野に (4257 船王伝誦歌)

ここでは折口氏口訳ひとつが「獵する」と解し
ています。まことに不審です。極めて活動的な狩
獵を歌いながら、その本番を避けたがるのが。

ますらをはみ獵に立たしをとめらは赤裳すそ
引く清き浜びを (1001 赤人)

女性たちは裳すそを引いてすでに活動していま
す。男性たちもすでに獵を催しつつあると見るこ
とこそ自然です。「獵立つ」「獵に立つ」は、いず
れも「獵する」が当たっていると思うのです。㊦

後宮にて其鞆の音をきき給ひて、今こそ御
獵し給ふならめと御羨しく思ほしめすなり。

(美夫君志)

これは「立つ」を催す意に解しています。次の
ように批判が他の面で呈せられるのです。

高市崗本宮と宇智野とはいたく離れたれ
ば、宇智野にて弓の響くが高市崗本宮なる後
宮に聞ゆべくはあらず、案ずるに此時の御獵
は宇智野に行宮を作りて連日御獵し給ひしに
て、中ノ皇女も此行宮まで御供し給ひしなる
べし。(井上氏新考) ㊦

井上氏は弭音を出発時の試弾と解しました。通
解との違いは、行宮を指定した一点です。それ
によって長短二歌の時点を一致させることに成功
しました。ただし、行宮の指定を保証してくれるな
にもありません。

まだ別な推定を必要にしています。弓音を耳に
し、それを「天皇の愛用の梓弓の弭音だ」と聞き
わけているのが長歌です。

弓弭の響にて天皇よと祭り奉らすなり。さ
るは天皇の御料は弓矢とも殊に勝れて有け
む。(野雁新考)

この必要不可欠の想定がまた疑問の種になっ
てきます。

しばらくあれこれの推測から身をひき、作品の
措辞そのものに心をひそめてみませんか。思いが
けない視野がひらけるものなのです。

長歌が一貫して歌っているところは天皇お一人
の弓であり、その弭音です。だれの弭音ともとれ
ない雑然たる音響では絶対ありません。妙に抽象
された、純粋な音なのです。はっきり申せば、
「弭音」も、さらには「草深野」も、作者の心の
耳、心の目に感得されたものなのです。それは単

なる客体描写ではありません。端的にいて、天皇に対する親和感の具象にはほかなりません。

これを要するに、「今」の幅とあいまって、幻聴・幻視の鮮かさを主題歌に看過すべきでなかったのです。⑧

わたしたちは作品そのものに聴くべきです。満足なことを、時にはそれ以上のことを、語ってくれるのが作品そのものなのです。

5

やすみししわが大君の 夕されば見し給ふらし
明けくれば問ひ給ふらし 神岡の山の黄葉を
今日もかも問ひ給はまし 明日もかも見し給はまし
その山を振り放け見つつ 夕さればあやに悲しみ
明けくればうらさび暮らし 荒妙の衣の袖は 乾る時もなし (159 持統天皇)

まだ御存生の如くおほめかれたる御心なり。如此見れば常のランなり。(赤松氏創見) 確実に朝夕御覧になるような気持のすることをランで表現している。(大系)

ほぼそのようにランは理解されています。もっと正しくは、山の黄葉の気配が「見し給ひ、問ひ給ふ」ような気持ちにさせたのです。全く同じことが主題歌にいえませう。今ごろは朝夕の猿をなされているような気がする。それというのも、「奈加弭の音」が契機になっているのです。それは幻聴であることは先に述べました。

もし通解に従って、出発時の所詠としたならば、直ちに父帝に献歌すればいいのです。行宮にあったならば、問人老を使にやるまでもありません。猿からもどられたとき手渡せばことすんだのです。

宮中を出発後と思惟しましょう。父帝恋しさに献歌したのです。その時、長短二歌が共々に猿場を思いやって、時宜に適しています。すでに出発後一、二日を経ています。朝猿夕猿のたけなわな日ごろです。弭音がまざまざと心耳に聞こえ、草深い猿場がありありと心眼に映じたのです。ということは、結果からいて、父帝への愛慕の表示です。ちょうど前掲持統挽歌がそうだったように。そこでは黄葉の視覚が切々たる慕懐を象徴していました。⑨

此歌なども歌舞所の台帳に伝った古典の一つであらう。私は、此の長歌と反歌とは別々のものとする。(「アララギ」大正10年折口氏説)

これを筆頭に、同趣の見解が諸家によって繰返されています。いうならば通念になった現状です。その代表の一人を石母田氏に見ます。本稿の第二項に長々引用した通り、氏は口を極めて長歌を難しました。その氏が同一論文で次のように述べるのです。

破綻と分裂のない反歌——これは同一の作者であるとしても、長歌と異った状況で、また献上歌といふ形式でなくつくられたものとする……。(前掲書181頁)

破綻と分裂のないのはなにも反歌だけではありません。二歌は木に竹を継いだごとき偶合歌ではないのです。

木に竹、といえば、第一歌を思いあわせませう。その前段と後段の関係について津田氏が同じ非難を唱えました。⑩ その場合と同様、主題歌においても僕は弁護を買って出ないではいられません。長短二歌は血のつながりにあるのです。

「その草深野」は想像的に現前せられたもの。その感慨は实景に接するそれにまさるとも劣らない深さだ。(創元社万葉集講座(3)西角井氏説)

この評言にだれも異議はありません。西角井氏が諸家と異なるのは長歌を同等に評価している点です。

「音すなり」も現前せしめられたもの。遊猿の様を偲んで弓弭の音が幻覚に響き、朝猿の露けき原野を思ひ画く、記紀に見られぬ感覚的な、鮮明な印象は吾々の近代感を賦与する為でもあらうか、時代的にみればまことに非凡の作といふ外ない。(同上書)

ここに、もう一人の幻聴支持者がいたのです。長歌を高く評価できたのも幻聴支持者なればこそです。

右の文中に「吾々の近代感を賦与する為でもあらうか」とありました。それは不用意な発言です。われわれが賦与したものではありません。作品が具えている本質的なものです。時代に逆比例して新鮮なのです。なぜこのことが可能だったかと

いいますと、当代の人々が精神的に若々しく、純粹だったのです。

とにかく、長短二歌は完全に匹敵対応しています。幻聴・幻視の差こそあれ、共に狐場の活動に心をはせています。爽快な気分が充満し、勇壮といっても過言でありますまい。その核として、「立たす」と「踏ます」が照応しています。「らし」と「らむ」の照応はいうに及びません。「朝狐」と「朝踏ます」の「朝」も対比されます。「夕狐」は、これは本来不要な添加ではありません。むしろ、反歌の方に表現上の限定が加わったのです。

6

おくればせながら、ここで反歌を検討します。四、五句の断続に立ち入りたいたいのです。「その草深野」の下にニ、またはヲを補うのが通解です。

第五句を第四句の上に倒置して受けとっているのです。

倒置ではなくて平叙である。倒装とすると、「その」の語が無意味に陥ってしまふ。
(金子氏評釈)

この享受が可だと思えます。

草深野ととめてあるために、露に満ちた朝の野に狐する情景が生き生きと現れて、然かも歌柄が大きくなって居るのである。(古泉千樞論講・随縁抄)

然りです。名詞でとめた後には当然余意余情が宿されます。それを過不足なく再述することは至難なわざです。

此結句は上に立かへるにはあらず。……下に嘆息のよをそへてきくべし。その八重垣をの類也。(墨繩)

これまた全く正しい。ただし、他の語に移すとき、さしさを生ずる。

……その春の繁野よ。うらやましき事かな。(同書)

この余意には賛同しかねます。

御身づからの羨しさをもいはで含ませ給へりけむ御情深さを思ふべし。(安藤野雁)

この方が救われます。

「くさふかぬ」と云ひすてたる故に余意ありて聞ゆるなり。おいさましき事かななどいふ余意あるなり。(井上氏新考)

この余意はいささかずれています。

音すなりは、都に居給ひてはるかあなたのなかはずの音の聞ゆることはもとよりなきことなれど、天帝をしたはしくおぼすより、御狐場のさまの御耳にも御目にも見えもするやうによませ給ふ事なり。(和歌叢書本略解頭注岡本保孝説)⑥

この洞察はすばらしい。ここにも、も一人幻聴支持者がいたのです。

その草の深い野よ。まあ懐しいことわ。
(金子氏評釈)

懐しさもあろうけれど、そうした言葉以上に、もっと純粹な気持ちで受けとることが望ましいのです。うらやましい、懐しい、勇ましい、——これらは「その草深野」の余韻そのものではありません。

朝の狐をなさるでありませう。其の草の丈高く茂った野のことが思はれます。(土屋氏私注)

これでいいのです。いささか説明に墮し、感動をつたえかねる点が気になりますが。

今ごろは、たまきはる宇智の大きい野に沢山の馬をならべて朝の御狐をしまひ、その朝草を踏み走らせあそばすでせう。露の一ぱいおいた草深い野が目に見えるやうでございませう。(斎藤氏秀歌)

「露の一ぱいおいた」は補足がすぎています。

「言はないと感じが出ない」(五味氏古代和歌)ことも確かです。「その草深野」の宿す感慨はいかに補足しても足りはしません。ここにあるのは理屈や説明ではなくて、感動そのものです。

「その草深野」と具体的なものを示さぬ表現でありながら、遠く隔ったものを近く引きつける感があって、鳥獸馳る大野を眼前に想像せしむる妙句である。力の籠った名詞止めである。それで柔らかみがある。(高田浪吉氏鑑賞)

遠いものを近く引きつける「その」の把握に感服します。⑦

「その」といふ指示の詞は簡素ながら強く実景を心に描かせる力があるやうに思はれます。大体この歌はあらはな詠嘆の詞は用ゐられてありませんが、深い詠嘆が力強く歌はれ

てあると思えます。(秀玉集土屋氏評)

「その」自体は具象力を持っていません。前に述べたところを指示することによってじかに面接させるのです。一歌の力強さはここに生起します。

結句の体言止めは詠嘆の気持を強く表わしてい、上からよどみない調べを引き締めてよく感動を盛り上げている。推量の表現をとってはいるが、狩り場の描写は具体的で、情景をあざやかに印象づける。(峯村文人氏 和歌抄)

推量だったものを具体化し、印象鮮明にさせた秘密も「その」を含む結句です。

第四句は句切れに通解されていました。第五句へ連体修飾することを提唱し、近年支持を得つつあるのは沢瀉氏です。それはおかしいことだと思います。ここでは致命的な一点に限って批判します。

……思ひたのみてこぎ来らむその夫の子が…
… (2089)

……こころ尽くして思ふらむその子なれやも
…… (4164)

これらのソノを主題歌のソノと同等と考えて立論しています。

これらは「思ひたのみてこぎ来らむ」「こころ尽くして思ふらむ」をソノが受け、それぞれに代ってソノが「夫の子」「子」を修飾しています。主題歌を同様だとすれば、ソノの被修飾語「草深野」が修飾語の一部、つまり「内の大野」として先行していることになります。これは異例です。日本語の文脈をなみするものです。次の二文をそのまま一文に続けたに等しいのです。

富士山に雪が積っている。その山が見える。

改めて付言します。第四句は切れています。切れることによって、第五句は一段と高まり、一歌を具象化し、感動そのものに昇華しているのです。

右のことを構想の面から明確にします。

- 1 (1) やすみしし……い寄り立たしし
(3) みとらしの……音すなり
- 2 朝猟に……夕猟に今立たすらし
- 3 みとらしの梓の弓の長弭の音すなり

1と2・3が対に受けとられています。

心情的には1が2を導き、統合された1・2の上に高揚されたのが3です。3は(3)の単なる反復ではないのです。

1' たまきはる(3)'内の大野に馬なめて

2' 朝踏ますらむ

3' その草深野

1'2'3'(3)'は長歌の123(3)と全く同じ関係で歌われています。とくに33'に注目していただきたい。長反二歌のいうべきことは1・2と1'・2'で尽くされています。それを統合し、次元を変えて、感動的に歌いあげたのが3と3'なのです。

このような二歌の照応は偶然ではありません。小手先の技巧でもありません。同一な情況に同一の感慨が託された結果です。

7

そろそろ、なにくれとないまどめをつけたいと思います。

やすみししわが大君の 朝とにはい寄り立たし
し 夕べにはい寄り立たす 脇儿が下の 板
にもが あせを(雄略記)

この作品と並べる時、長歌が伝承歌謡によりかかっていることが公認されました。個性が全面的に否定されるまでになりました。

整然たる結構と、その調律の美しさは、まさに謡ひ物としての姿を示す……。即ちこれは皇后(中皇命)の新作ではなくて、既に伝誦されてきた古曲である……。 (沢瀉氏講話 (2))^⑩

このような大勢に対し、次の見解は異例でした。

なほ皇女の精到深切な自然理解と強力な表現力によってなされた創作であることを知るのである。決して伝承のみによって成り立つ民謡の類ではない。(土屋氏私注)

これを全くの伝誦古曲とする事は出来ないと思ふ。それは先に述べた心躍りの表現の適切さに、猟場に行かれぬ女性の爽快な状景を思ひやる姿があまりにも鮮明に浮かんで来る……。 (五味智英氏古代和歌)

五味氏は長歌の重畳するリズムを指摘し、結論します。

跳ぶやうな躍動感がある。これは音の爽か

さと相俟って、作者の猟場を思ひやっの清朗な心躍りを如実に表はし得て居る。(前掲書)

氏は「立たす」を出発に解し、出発時の音を耳にしつつ、ただちに猟場の情景へ思いをはせています。土屋氏もその点が曖昧です。

オトスナリ 見前に音を聞いて居られる表現である。事実は御猟の弓の音は聞えぬ程度の距離に於いて作られたものと思ふが、如斯は詩的現実とても云ふべきであらうか。(私注)

「立つ」は猟することとし、すでに催されつつある猟場の幻聴とするにきません。その時、両氏の理解鑑賞は光彩を放ちます。幻聴の立場は二つの「今」も息を吹き返します。さもなければ両氏も次のような不徹底に低迷するのです。

暮猟 これは対句の都合で軽く用ゐたもの……。 (五味氏前掲書)

ユフカリニ 之も朝夕の猟を一度に見るごとくで通俗理論に合はないのであるが、同じく詩的現実である。(私注)

その後、長歌を顕彰するような発言はありませんでした。それどころか、決定的に難詰する見解が提示されました。それが例の石母田氏の発言です。

その後、こんどは西郷信綱氏から新しい提言がありました。

この歌(第3歌)が歌謡を基礎にもつのは否定しえないにしても、それがもはやたんなる歌謡でなく、歌謡以上のものであることは、そのリズムからしても、「強い事物把握の精神」(土屋氏私注)からしても明瞭だといはねばならぬ。(西郷氏私記59べ)

この新鮮な見解は石母田氏批判から出発しています。

進んで立ち入った検討がしたい。それが本稿全体の結びにもふさわしいと思うのです。

西郷氏は長短二歌をともに出発時の所詠としました。両歌の成立事情を分析し、狩猟を予祝する儀式歌と規定しました。

このようにして長短二歌が統一的に理解されたのですが、致命的な誤認をふまえていることを悲しみます。それは次のごとくです。

ラムという推量は、作者が朝猟の行われていた現場に、傍観的に「外部から」想っているのではなく、やがて行われるであろう宇智野での狩猟を、「それ以前」の時点で未来的に祝福し、希求し、想像しているのであり、朝猟がとり出されたのも、猟そのものの象徴であったにはほかならぬ。(同書68—9べ)

これはラム(ているだろう)を根本的に誤解しています。

あえて断言します。いま現に狩猟中だからこそ現実感を獲得できたのです。長短二歌は幻聴・幻視ですが、単なる想像ではありません。ありありと、鮮かに、ふるい立たせるほどの力となって迫ってくるのです。それは実体験の親密なる想起です。ここに生々しい心躍りが高鳴ったのは当然です。一歌を観念から救った秘密はこれです。

その調べは露滋き野を馬の胸分け進む音さへ聴き得る。(岩波講座「日本文学」(4)五味保義氏評)

それはひとえに実体験の裏づけあつてのことです。作者に間人連老を擬す主因をここに看取します。⑧

も一と言います。主題歌の具象性はひとえに体験の裏づけによります。その新鮮さこそ両歌の生命です。観相の深さ・直接さは驚異です。作者の全神経が生きて見せています。作者間人連老一人ではなくて、古代人の典型をそこに感じます。

8

以上のことを私的な研究会⑨で発表しました。それはつい最近のことです。たまたま宮脇昌三氏が傾聴してくれ、賛同を表明してくれました。そればかりではない。新たな視点を指摘してくれました。それは僕にとって大きな驚きでした。

宮脇氏はいわれます。——十歳前後の少女が父君を慕った気持ちが主題歌の根底にありはすまいか？

僕は反射的に答えました。

——主題歌は幻聴・幻視の冷たい心理分析ではありませんね。心理作用の客観的な観察報告などではなくて、情愛の披瀝がねらいですね。

宮脇氏はいいい添えました。——愛情と猟場の実体験とが作歌母胎だったのだね。

——そうです……と、僕は、無条件で同意しました。

作者は間人老だと思われます。幻聴の聞こえることをまず皇女が老に語ったのではないのでしょうか？

幻聴は父帝への愛情あればこそ聞こえたのです。老は皇女の心になり代って幻聴を聞き、幻視を見、追体験の裏づけをもって主題歌を歌いあげたと考えます。

改めて万葉初期の特質を再説します。それは明るさであり、主観と客観が完全に融合していることです。主題歌が新鮮な具象性を獲得した秘密はこれです。健康そのものというべきです。

いまや措辞の巧拙は二の次です。宿されている心情を見るべきです。その純粹さだけが問題です。

注

① これに関しては「万葉集の中皇命」第一部（長野大学紀要第1巻第1・2号合併号）でやや詳しく論述しました。

② 原文を尊重し、しばらく「奈加弭」のままにしておきます。訓も、そのもののエタイも知れていない現状です。といって、原文を改める勇気を持ちかねます。ひとえに後考にまつものです。

③ 古注を中心に摘記します。

——夕獵は辞の対をなせるのみ（攷証）、ただ調べの為にそへたるのみ（檢爪・墨繩）、詞の文のみ（野雁新考）、朝庭夕庭を受けて文なせるのみ（古義）、単なる飾詞にすぎず（左千夫新釈）。

照応させるといった形式美に流れ（新講・評説・作者類別）、今が朝であるか夕であるかを混乱させる（武田氏柿本人麻呂）、はめがたい「文飾に過ぎない」（大成(1)同氏評）。

④ 清水克彦氏は石母田氏に全面的に賛同し、次のように付言する。

この時期において、和歌的言語とは何かという事に就いて、明確な解答が与えられている事、さらに後世において、このような形式と技巧がそれにふさわしい精神にめぐり逢う事によって結実した事、この二点において、これらの作品そのものの失敗にもかかわらず、わたくしは初期万葉人の達成したこの形式や技巧を、肯定的に評価したい。（万葉論集25べ）

このおめでたい楽観は石母田氏の見解とは逆でな

かったかと思われま

⑥ 吉永登氏の「通説を疑う」から関係箇所を引用します。

美夫君志の語釈に「今こそ御猟し給ふならめと御羨しく思はしめすなり」とあるのが目についた。もっとも、この美夫君志にしても、大意のところでは「今父の出立せ給へるに……」と言っているの、どっちがその本意であったかは明らかでない。そのほかには、山田孝雄の講義の語釈の条に「獵場に立ち出で猟したまふを推量して」とやや曖昧なのがあるばかりで、いずれもはっきり出発説をとっている。（13べ）

吉永氏は文献をかたっぱしから点検したとおっしゃる。だったら野雁新考も折口氏口訳も目についたはず。それらを故意に無視したんだ、と言ったら、邪推だと言いつ返されるのでしょうか？

⑦ ここの引用歌の諸注は、

926歌、総釈新村出氏ひとり出発説。

49歌、猟をしつつあるのは美夫君志・折口氏口訳・井上氏新考・金子氏評釈・山田氏講義・斎藤氏（秀歌・柿本人麿）・佐々木氏評釈・沢瀉氏注釈。1001歌、狩猟説は全釈・私注・大系。

⑧ 同考、——山田氏講義・総合研究西村氏説・吉永氏「通説を疑う」

⑨ ——幻聴を普通の聴覚なみに「音すなり」ですませていいものか？

青旗の木幡の上を通ふとは目には見れどもただにあはぬかも（148 倭姫皇后）

これは幻視です。普通に見るのとなんら区別していません。幻聴と同様だったに相違ありません。

⑩ 次の秘密を銘記しましょう。

——むしろ喜怒哀楽をあらわに表出しないところに感動が色濃く宿される、ということ。

その例証に次の二歌を掲げます。愛弟大津皇子に別れを惜しんだ同時の所詠です。

わが背子を大和へやると小夜ふけて曉露にわが立ちぬれし（105 大伯皇女）

二人ゆけど行き過ぎがたき秋山をいかにか君が一人越ゆらむ（106 同）

老婆心ながら付言します。感情をあらわにしないということは、感情を殺すこと、純写生でいくことを意味しません。感動に裏打ちされた写生が大切です。底からこみ上げてくる感動がすべてです。

⑪ このことは長野大学紀要第8号の拙稿「万葉巻頭歌の「告らじ」弁護」をご参覧ください。

⑫ 幻聴説をとる注釈を挙げてきました。そこに金子

元臣氏評釈を加えたのですが、同書の次の「歌意」は不協和音です。

朝眞に今しもお出掛け遊ばすらしい、夕眞に今しも御出掛け遊ばすらしい。

も一人、亀井勝一郎氏が幻聴説をとっています。

愛用の弓の中弮の音を耳に思ひ出して、その音の彼方に、背の君の丈夫ぶりをしのんである。(同氏古代知識階級の形成107ペ)

中皇命を、舒明天皇に嫁したばかりの斉明天皇と解したため一歌の理解をひずめたのは惜しいことです。「中弮の音を耳に思ひ出して」も改めたい。「その音の彼方に」でもなくて、「彼方から」幻音が伝わってきたのです。

⑫ 石井庄司氏の「考究」に対比的な評論があります。次に抜記します。

眼前に見えるやうな光景ではあるが、かなり遠い景色として描かれてある。背景も広ければ、視野も広いのである。しかし人麿のものになると、

あごの浦に船乗りすらむをとめ等が玉裳の裾に潮満つらむか(40 人麿)

といふのであって、対象に接近レンズを向けてあるのである。単なる想像ではなく、全く眼前にありありと現出されてあるのである。(万葉篇120—1ペ)

一言借問したい。——主題歌は「光景」や「単なる想像」にすぎないでしょうか？

たしかに細叙していません。が、け遠い、漠然たる光景などではありません。躍動として歌われています。第三者もその中へ引きずりこまれる思いです。

それは小手先の技巧ではなく、はえぬきの力です。人麿などのはるかに上をいくものです。

⑬ 沢瀉氏のこの態度は終始変わりません。すなわち、——講話(2)・万葉の窓・万葉歌人の誕生、最後に注釈。

右に完全に同調しているのは、——坪野氏秀歌・田辺氏初期万葉の世界・争点山崎氏説・神田氏初期万葉の女王たち。

一方、第四歌については、

天皇の宇智野への行幸にあたっての皇后の創作と見るべきである。(沢瀉氏注釈)

この強い断定は無稽です。作品そのものに耳を傾けなければなりません。宿された肉声を忘れるべきでないのです。

⑭ 吉永氏は主題歌の作者について次のように述べています。

老の作ならば皇女を特に持ち出すこともなからうと思われるし、かたがた老の作としても皇女の立場で作っている以上、皇女の作として考えるのが当然であらう。(前掲書20ペ)

皇女のために老が代って作歌しました。二人を持ち出さないわけにいかないのです。その際、「皇女の作」と断じるのは暴論というものです。こういう超論理を8歌、17・18歌等にも適用してはばからない当今の学界なのです。

8歌の作歌事情については拙著「省察」(1)のその稿を参照のこと。

⑮ 昭和52年9月、諏訪国文学会第11回公開研究発表会。